

エディトリアル

岩手医科大学 救急・災害・総合医学講座 総合診療医学分野 教授 下沖 収

岩手県には、山間部が8割を占める広い県土に小さな市町村が散在している。つい数年前まで県都盛岡から三陸沿岸市町村へは、峠越えて2時間以上を要した。厳しい地理的条件に加え、人口あたりの医師数は全国43位、医師偏在指標もワーストの状況である。東日本大震災の影響もあり急激な人口減少の中であって、地域医療の安定的確保はさらに厳しさを増している。しかし、このような逆境の中でも多くの先達たちが不断の努力と工夫を積み重ね、気概をもって地域の医療を守ってきた。この恵まれない環境こそが、「地域医療レジリエンス」ともいうべき逞しさを醸成してきたのかもしれない。今回、岩手の地域医療について特集していただくことになったのは、このような背景によるものと認識している。現在、地域枠等の奨学金養成医師の配置が本格化しはじめ、地域の医師不足は徐々に改善するものと期待されているが、医学生への地域医療教育、義務履行の中でのキャリア形成、自治医科大学卒業生にみられるような「連携・連帯感」や「地域医療マインド」の醸成と定着など、多くの課題も挙げられている。

今回の特集タイトルを、「岩手県の地域医療を支え・育てる」としたのは、これまで岩手県の地域医療を支えてきた特徴的な取り組みを紹介しながら、これからの地域医療を支える人材を育てる取り組みについて共に考えたいとの思いであった。

総論は伊藤達朗先生に、医療過疎の中で住民自らが医療施設を起ち上げ、やがて全国最多の県立病院へつながっていく経緯とともに、先駆的な公立病院(沢内、藤沢)の取り組み、現在の医療課題と展望について俯瞰的に解説していただいた。吉田徹先生には、県立病院の日常的なネットワークが東日本大震災時に横軸連携として機能し、その後の情報ネットワーク整備につながったこと。そして最も医師不足の深刻な宮古医療圏における病院連携について解説していただいた。一方、より住民に近い地域医療を実践する診療所、開業医の役割については菊池俊彦先生に、経営者の視点も交えて述べていただいた。

「育てる」の観点では、大間々真一先生が地元の岩手医科大学が地域医療に貢献してきた歴史、自治医科大学卒業生にキャリアアップの場を提供しながら、良い関係性で実践する救急医療や災害時対応を紹介している。また、2017年に岩手医科大学に開設され、地域医療を支える総合診療医養成を目指す総合診療医学教室の取り組みについて、高橋智弘先生に紹介していただいた。そして医師奨学金養成制度の現状とともに義務履行の中で求められるつながりの構築について、田鎖愛里先生に述べていただいた。

地域医療の安定的確保は全国どこでも最重要課題とされているが、厳しい環境の中だからこそ育つ「連携・連帯感」や「地域医療マインド」は地域医療を実践する上で欠かせないものである。今回の岩手県の特集が、各地域の取り組みのために少しでもお役に立てれば、幸甚である。